

「古歌『植えて見よ』をめぐって」

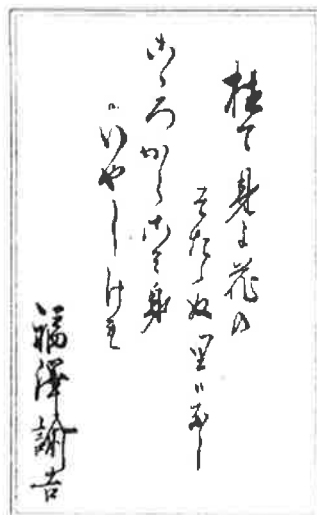
1 福澤諭吉と竹内使節団

幕末の文久元年一二月二三日（一八六二年一月二二日）、正使・竹内下野守保徳、副使・松平石見守康直、目付（監察）・京極能登守高朗の三人を特命全権公使とする遣欧使節団一行を乗せたイギリスの軍艦オーディン号が品川沖を出帆した。幕府は、万延元（一八六一）年に、最初の遣外使節団となる正使・新見豊前守一行を、日米修好通商条約批准書交換のためにアメリカに派遣していたが、それに続いて、江戸・大坂の開市（外国人への居留許可）と兵庫・新潟の開港の延期交渉のために、ヨーロッパの条約締盟諸国にも使節団を派遣することにしたのであった。



左から松平石見守康直（副使）
竹内下野守保徳（正使）
京極能登守高朗（副使）
柴田貞太郎（組頭）

【史料 No. 1, No. 2】



2 「植えて見よ」の掲出

- ①慶安四（一六五一）年 『わらひ草』（内題「旦露笑草」）
「うへて見よ花のそだたぬさともなし心からこそ身はいやしけれ」
- ②万治二（一六五九）年 『百物語』上
「植て見よ花のそたゝぬさともなしころからこそ身はいやしけれ」
- ③万治二（一六五九）年 『私可多咄』二
「うへてみよ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」
- ④万治三（一六六〇）年 『女式目・下』
「植て見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」
- ⑤延宝五（一六七七）年 高瀬梅盛『俳諧類船集』四
「うへて見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」
- ⑥貞享四（一六八七）年 榎本其角『吉原源氏五十四君』
「うへて見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はさもしけれ」
- ⑦元禄一三（一七〇〇）年 『続狂言記』五
「植ゑて見よ花の育たぬ里もなし、心からこそ身は卑しけれ」
- ⑧享保二（一七一七）年 天野信景『塩尻』六十五
「植て見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ」
- ⑨享保四（一七一九）年 西川如見『町人囊』
「植てみよ花のそだゝぬ里もなし」
- ⑩安永三（一七七四）年 平賀源内『里のをだ巻評』
「植て見よ花の育ぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ」
- ⑪安永九（一七八〇）年 立松東蒙『当世阿多福仮面』
「植て見よ花のそだゝぬ里もなし」
- ⑫天明八（一七八八）年 大槻玄沢『蘭学階梯』
「ウエテミヨハナノソタタヌサトモナシココロカラコソミワイヤシケレ」

3 古歌の「心」

① 『わらひ草』

人と人との間には本来「へだて」など存在しない。

「平等の仏性」

心持ちこそ「高位」にしていることが大切なのであり、それゆえにこそ「身ハもとよりいやしからず」。

【史料 No. 4】

⑨ 西川如見『町人囊』

「人間は陰陽五行の神物なり。其始、尊卑の隔なく、都鄙のかはりなし」

「尊卑都鄙の品相分」かれるのは、人の成育する環境による。

「畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし。唯生立によると知べし」と説く。

ましてや「人間本心の上」において、「貴賤の差別」なぞあろうはずがない。

たとえ貧家にいても「心は万人の上に延んものなり」と、まとめている。

【史料 No. 6】

⑩平賀源内『吉原細見 里のをだ巻評』

麻布先生・その門人の花景・客である古遊山人という三人が登場し、古遊山人と花景が江戸の遊里である深川と吉原の優劣を論じあう内容。

そして、花景が、岡場所としての深川を擁護する立場から、古遊山人への反論として、「植て見よ」の歌を引き合いに出し、以下のように主張。

花景をして「同じ天地の間に生ずる人間、国をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて其品を論ずるは僻事なり」と言わせている。まさに下句の「心からこそ身ハ賤しけれ」は、人に「へだて」はないという意。 【史料 No.7】

⑧『塩尻』

「人性皆善、克己せば誰か小人なるべき。只志の固からぬを難す。」

人は向上心をもって努力することが大切であるとして、「植て見よ」の歌を引用している。まさに、心の在りようとしての「志」を重視。

【史料 No.8】

4 古歌の教え「本立て道成る」

②『百物語』

「道」に「立つ」ことから、すべてがはじまる。

「道」を歩いていくには、さらに「心をつくして習」わなければならない。

「本立て道なる」ということわり。

【史料 No.9】

③『私可多咄』

『塩尻』が記す「志」に継承される解釈として、「おなし人間と生れたるほどに、人品を引くらへて、さうおうのうち、よきにこゝろさしたきもの也」

「よきに」志さなければならないというところで、『百物語』の「心をつくして習」わなければならないという教えとも通じる。 【史料 No.10】

④『女式目』

不器用な人はすぐ心得違いをして物事を投げ出す。

稽古には「神変」があり、「なすに、ならさるといふ事はなし」

「こがね」を求めるのと同様、「やすきをすて。むつかしきを、このむべき」

「心に、ゆだんなく。此道を、こゝろがけ」ることの大切さを説く。

【史料 No.11】

5 ロニーの理解

ロニーは『日本文集』、8年後の『詩歌選集』に福澤自筆の「植えて見よ」を掲載。

※ロニーによる古歌の仏訳

「植えてみなさい。花を咲かせない里などないのですから。私たちの人品が〔時として卑しくなるのは、心〔の至らなさ〕によるのです。〕となる。」

※仏文解説

「この歌の言わんとするところは、人は誰しも、熱意をもってすれば、よき成果を得ることができるといふ意味です。もしよき成果が得られないとすれば、その原因は、人の本性に固有の欠陥によるというよりも、はるかに、その人の精神からおのずと発したなげやりの気持ちにあるのです。」とでもなろうか。

6 まとめにかえて

(1) 『わらひ草』・『町人囊』・『里のをだ巻評』

下句「心からこそいやしけれ」に主眼をおいて、古歌の「心」を理解する。

「人品」について「尊卑」・「貴賤」の別が生じているのは、その人がどのようなところに身をおいて成育してきたかによる。→「唯生立による」

↓

本来、「根本の所」において、人には「尊卑」・「貴賤」の別などない。→「平等」

(2) 『塩尻』 → 目標を設定しそれを達成したいという「志」を抱くからには、 「克己」しなければならない

(3) 『百物語』・『私可多咄』・『女式目』

上句「植えて見よ 花のそたゝぬ里もなし」に主眼 →「修業」の大切さを説く。

「手習の志ようの事」

「女、とりわけ、手ならひ、し給ふべき事」

「連歌の嗜み」

※抱いた「志」を実現するためには、「怠ることなく継続して取り組む」ことが大切。

人は現実に努力を尽くさなければ「志」は達成されない。

(4) 『継続は力なり』・『たかが〇〇、されど〇〇』

※「手習い」などの芸事はもちろん「学問」を修めようとするにあたっての心構え、修業や努力の大切さを説いているこの歌は、それ故に、江戸時代初期から多くの人に知られていき、独学で日本学・日本語を学びつつあるロニーの「心」に大きく響いたと思われる。

※この歌は、たとえ挫折しそうになっても、その「志」が固ければ、何事も成し遂げられるのであると教えているが、そもそもの出発点は「心」にあることを知るべきであろう。

※厳しい環境のなかでの修業や努力がいかに困難であろうとも、この「心」を「心」として励むことによって「道」が成就するというのが、この歌の本意であった。換言すれば、「たかが」ではあるが「されど」と考え、初心を忘れることなく、「克己」・「勉励」・「研鑽」することの大切さを伝えている歌意とも言えよう。

参考

* 拙稿「福澤諭吉とレオン・ド・ロニー、そして『植えて見よ』の古歌」

(『白門』第65巻第8号、2013年8月)

* 拙稿「植えて見よ」(『白門』第65巻第1号、2013年1月)

20140405 (土) 15:00～17:00
中央大学駿河台記念館 570 号室
菅原 彬州

中央大学信窓会東京支部講演会 配布史料

史料 No. 1

【松木弘安 (=寺島宗則) 書簡】

(『福澤諭吉全集』第 19 卷)

羅尼先生ニ呈ス

巴里斯ニ在リシトキハ。過分ノ御周旋ヲ蒙リ。アリガタク存ズルナリ。貴君ト別レテヨリ。皆々ノ者。直ニ便ヲ出スベキニ。却テ貴君ノ方ヨリ。信ヲ蒙リ。恐レ入りタリ。先日御別レ申シタル後ハ。貴君相変ラズ。御機ゲンヨロシカルベシト。皆々喜コビオレリ。此方ニテモ皆々壯健スゴヤカナレバ。憚ナガラ。御心易思ヒタマワルベシト願フ○去ル四月二日日本ノ年号ロンドンニ着セシ後ハ。一人ノ友モ無ク。毎日快ヨカラズ。暮シ居リヌ。今思ヘバ巴里ニテ貴君其外ノ君ノ親切ナル志ノ恩ニ感ゼサルコトヲ恨ト思ヘリ。願クハ其罪ヲ免シタモウベシ○先日贈リタマワリシ日本使節ノ事ヲ書キシ新聞紙ハ。貴君ノ著作ト見ヘ。ヨホド委ク事情ヲ述ベタリ。実ニ感シ入り多謝々々○此度ワンデルウル君巴里ニ到ト聞テ其君ニ言イシコトヲ貴君ニ言ワント思ヘドモ。貴君ニハ近日御目ニ掛ルガユエニワザワ言ワズ。此書ニ言ヒ残シタルコトハ。ワンテルール君ヨリ聞キタマワシコトヲ願フナリ

adieu Monsieur

日本四月十三日夜

千八百六十二年五月十一日

松木弘安書

箕作秋坪 伝声

福澤諭吉

史料 No. 2

【福澤・滞欧日記】

(『福澤諭吉全集』第 19 卷)

巴理の羅尼来る。此人は日本語を解し又能く英語に通ず。日本使節巴理に在りし時より時々旅館に來り余輩と談話せり。使節荷蘭え逗留中、羅尼、政府の命を受け、日本人を見る為めハーグに來り、留ること二十日許、母の病を聞き巴理え歸り、今度又た日本人を尋んとして別林に來りしに、余輩已に同所を出立せり。由て又た別林より伯徳祿堡に來れり。別林より伯徳祿堡までの道程八百里、火輪車にて此鐵路を來る入費四百フランク。唯余輩を見ん為めに來る。歐羅巴の一奇士と云ふべし。

史料 No. 3

栗本鋤雲『暁窓追録』

(『幕末維新パリ見聞記』岩波文庫に所収)

(慶応三年一月、パリで開催の万国博覽会に派遣された徳川昭武一行が反仏親英論へ傾斜するのを、幕府本来の親仏論に引き戻すという幕命を帯びて渡仏、)

「岡士『フロリヘラルト』学士『ロニー』共ニ我国ニ航來スル者ニ非ス、然レトモ「フロリヘラルト」ハ我国ノ岡士日尼拉爾ヲ任セラレ、『ロニー』ハ我国ノ書ヲ讀ム者ニシテ共ニ我国ニ因アリ、故ニ皆強メテ我国ヲ主張シ若シ詆ル者アル時ハ佛然ノ色言面ニ見ルノミナラス、平常ノ嗜好モ亦粗々我ニ模倣セントセリ、凡ソ洋人ノ洋茶ヲ喫スル必ラス糖ヲ點シ然ル後始メテ咽ニ下ル、今此二人甚タ我ノ茶ヲ好ミ常ニ糖ヲ加ヘス、又時ニ抹茶ヲ嚙ム聊矯飾ニ出テス、『ロニー』ニ至リテハ洋烟ヲ喫セス我ノ煙ヲ喫シ管袋都テ我カ邦製ヲ佩セリ」

史料 No. 4

①慶安四（一六五一）年 『わらひ草』（内題「旦露笑草」）（国立国会図書館蔵）

「うへて見よ花のそだたぬさともなし心からこそ身ハいやしけれ」（原版本）

「たゑまの中将姫哥、

うへて見よ、花のそだたぬ、さともなし、心からこそ、身ハいやしけれ。

このうたのころは、濁水泥土の中よりも、蓮のはなのひらきいづるうへハ、はなは所をきらわす。たとへハ、いななかのかたはらにも、うゆる人さゑあらは、よもそだたぬ事ハあらし。まづうへて見よ。

（中略）

人げんハ、たかきもいやしきも、ミナ、ほうかいの五たいをかりて、生したる身なれば、ほんらいに、へだてハなし。平等の仏性ハ、にしきにて、清浄なり。愚人は、よるにて、ひかりをうづむにいたり。心からこそ身ハいやしけれ。ころたに、高位になし候ハ、身ハもとよりいやしからすといふ、ころこれなり。まことなるかな。」

史料 No. 5

⑤延宝五（一六七七）年 高瀬梅盛『俳諧類船集』四（早稲田大学図書館蔵）

「うへて見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身ハいやしけれとハ中将姫の哥となん」

史料 No. 6

⑨享保四（一七一九）年 西川如見『町人囊』（『近世町人思想』日本思想体系第59巻）

「或書に云、「日本は異国に違いて神系を尊びたる国にて、高家みな神明の血脈なる故、道德口才秀逸成人は、必ず公家・武家の中より出る者也」とあり。或人は是を論じていへるは、「此書の説、其理いまだ委しからず。植てみよ花のそだゝぬ里もなしといふ歌は、誰も知たる事ながら、委しく意を付る人のなきにや。夫人間は陰陽五行の神物なり。其始、尊卑の隔なく、都鄙のかはりなし。しかれ共出胎已後、漸々習ひ染る処によつて、尊卑都鄙の品相分る。此故に都の小児、鄙にて成長する時は則鄙人の風俗と成、鄙の小児を都にて成人せしむれば、則都の風俗となれり。町人などの中には、其先祖歴々たる処の者甚だ多しといへ共、常の町人に替たる人品もなし。愛宕殿蔭とならるれば蔭の心有とかや。名もなき町人・百姓の子にも、幼少より習ふ所によつて、篤実広才なる者も昔より多く出たる事有。総て高貴の人は胎内より氣に触物にうつる所、皆いやしからず、見る事聞事、食事衣服のそなへゆたかに、弓矢墨筆のたぐひよりいやしき物をば手にさへとらず、心にくるしむ事もなくて成長あるゆへに、能書文学才芸も成就仕安し。町人・百姓の子は胎内より市井の風俗にそみ、幼少より薪とり水汲土掘の業、又は荷もち細工等を所作とす。故に手足筋骨もあらあら敷ねぢけたり。能書文学の暇もなく、偶暇有とて、筋骨こわくて筆をとるに不堪、能書の嗜ある人は、ふすま障子をさへみづからあけたてをせずといへり。たとへ下賤土民の子なり共、出生より其俣富貴の家にて成長せしめなば、能書文学の誉れ有人も多く出来べし。ましてや剛臆などは貴賤による事にあらず。思ひなしからによくもあしくも見ゆる事多からん。貴人の血脈はみなおのづから君子となる理ならば、胎教のみち幼儀のならひなども無用成事也。その俣置ても德行博才の人となる理なりといへども、生立あしければ不徳無能の人と成と見えたり。

いかに凡卑の血脈といふ共、胎教の道を守りて胎内より正しきみちに触しめ、出生しては君子の傍に置いて幼儀を習ひ、才芸をもてあそばしむる事あらば、天性命分の品に依て、美悪鈍智の替りは有共、其人品、高位高官の人に替りなかるべし。畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし。唯生立によると知べし。傾城は多くは下賤なる者の子なれども、幼少より風流にみがき立る故に、諸人を誑ほどの姿風俗となれり。況や人間本心の上におゐて、何ぞ貴賤の差別あらん。いかなる賤がふせやに居ても、心は万人の上に延んものなり。武家は氏筋を正して家の威を逞くしたまはん事最なり。町人の氏筋をたつるは必ず貧乏の相なりとかや」。

史料 No.7

⑩安永三（一七七四）年 平賀源内『里のをだ巻評』（『江戸吉原叢刊』第5巻）
「其時花景、銀烟管を取直し、灰吹をくわちくわちと敲、あざ笑て曰、古遊子の論、高きに以て甚低し。されば古哥にも、植て見よ花の育ぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ。同じ天地の間に生する人間、国をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて其品を論ずるは弊事なり。いかにも吉原は日本第一の遊所にて、女の姿の勝れたりといへども、百人が百人、千人が千人ながら能と定たるにもあらず。細見嗚呼お江戸の序に有ごとく、或は骨太、毛むくじやれ、猪首、獅子鼻、棚尻の類、なきにしもあらず。吉原の女郎なればとて、代々其家筋有て、女良が女郎を産にもあらず、腹の中から詭て、拵させるにもあらず、又、岡場所の女良とて、下り細工の出来合にもあらず。つまる所は親兄弟榮耀榮華で売もせず、為事なしの廻り足、吉原へ行、岡場所へ行も、皆夫との因縁づく。能も有、悪いもあり。」

史料 No.8

⑧享保二（一七一七）年 天野信景『塩尻』65（『日本随筆大成』第3期、第15巻）
「植て見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身はいやしけれ
人性皆善、克己せば誰か小人なるべき。只志の固からぬを難す。」

史料 No.9

②万治二（一六五九）年 『百物語』上（『仮名草子編』〈近世文学資料類従〉第24巻）
「人の語りけるハ。東坡居士のいひをきしとかや。人の手ならひするに先真をならひ。次に行をならひ次に草を習べし。真ハ立がごとく、行ハゆくがごとく草ハワしるがごとし。それよくたつてゆかずハはしるものハあらじといへり。此事事文類聚に見えしと也。誠に本立て道なるといふことワリなるべし。此国にならへるハ東坡のいへるとはかへさまなり。先草を習て行をならひ真をならふと也。かくのごとき人もまれなり。たゞ大かた草ばかり覚るゆへに文盲にして真に書字ハよくしりたる字にてもよミえざるなり。いと口おし。心をつくして習なば。などかならひえざらん。哥に、
植て見よ花のそたゝぬさともなし
こころからこそ身はいやしけれ
といへり。又兼好も手のわるき人のはからずかきちらすハよし見くるしとて人にかゝするハうるさし。」

史料 No.10

③万治二（一六五九）年 『私可多咄』二

（『嘶本大系』第1巻）

「廿九 昔、孟子の母ハ子をよくそたてられし人也。孟母三遷といひて、孟子のいとけなき時、三たひすミ所をうつしかへ、儒者のほとりにゐて、つねに学問者になせる也。されハいまめかしき事なから、いとけなき子をそたつるにハ、よき道を見ならハせ、きゝふれさすへき事也。かならず人ハ、つねに有くせ、よしあしにつきて、そのふるまひあるもの也。いつの比なりけん、庄屋と商人に碁をうたせて、出家と武士と医者に見物しけるか、思ハすしらす面との事を云出せり。庄屋碁をうち入、覚えすなから、とかく地をとらふ、とかく地をひろけうといふに、あひての商人、あまり目をせるまいそ／＼と云ふ。見物の三人のうち武士のいひけるハ、かつてかふとの緒をしめよ。はた色かわるふなつたなどゝいへハ、医者、もはやぎばか薬てもかなハぬなどゝいふ。出家、死ぬるか死ぬるかな、南無阿ミたふつ南無阿ミたふつといふた。

うへてみよ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身ハいやしけれ

おなし人間と生れたるほどに、人品を引くらへて、さうおうのうち、よきにこゝろさしたきもの也。」

史料 No.11

④万治三（一六六〇）年 『女式目・下』

（『仮名草子集成』第11巻）

「たとへて、申侍らハ。こがねハ、世にまれなれハ。もとむるに、むつかしとて、もとむまじきや。なまり。あかがね。しんちう、といふかねハ、もとむるに、やすしとて。是を、もとむべきか。此、三いろの、かねハ。もとめて、益すくなし。こがねハ、少もとめても、益太なり。たゞ、やすきをすて。むつかしきを、このむべきことなり。あるうたに

植て見よ花のそたゝぬ里もなし心からこそ身ハいやしけれ

此哥の、こゝろハ。万の、草木の、たねをもちて。わが家の、地をゑりきらひ。つち、かたければ。そたつまじ。しつけあれハ、はゆましき、なといひて、そのたねを、うゆる事、なければ。一生、もとむる事なし。たとひ、つち、おもふやうに、なくとも、そのたねを、うへバ。雨露の、めぐミをうけて。しぜんと、はへいて。さかふる事、あるべし。

てならひも、もつて、かくのごとし。われハ、物かく事、なるまじき、とおもひ。つとめざれハ、かの、まかざる、たねの、ごとくにて。かくべき、道理なし、ぶきやうなり、といふとも。心に、ゆだんなく。此道を、こゝろがけ、ならひ侍らハ。月日のたつに、したがひて、かく事、必定なるべし。」

an aspect

植えて見よ

すが わら もり くに
菅原 彬州 (法学部教授)

猛暑が続く夏期スクーリング第1期中の8月7日、「植て見よ／花のそた、ぬりハなし／ころからこそ身はいやしけれ」という古歌の解釈について、敬愛する仏文学者の名誉教授から、メールで尋ねられた。寡聞にして知らない歌であった。手がかりは、この歌が色紙に書かれていて、福澤諭吉が、竹内下野守ら幕府遣欧使節団の一員として滞欧中、後にフランスで初の日本語教師となったフランス人青年に献呈したということであった。

何はともあれ、先ず歌の文言そのものをネットで検索したら、書き込みの中には、詠み人を良寛とする人、「いやしけれ」を「癒しけれ」と解くなど理解も様々で、どうも腑に落ちない。更に検索を続けると、間崎万里の論文「福澤諭吉の『西洋事情』」に辿り着いた。それによれば、この歌は、福澤が詠んだ唯一の歌と見なされていたがそれは誤りで、西川如見の『百姓囊（ひやくしょうぶくろ）』や大槻磬水（玄沢）の『蘭学階梯』に記されているとある。後者の大槻の師は『解体新書』で知られる前野良沢で、大槻は天明8（1788）年に蘭学の入門書『蘭学階梯』を著し、その中でオランダ語発音の例示として、この歌を用いている。福澤は大坂の「適塾」で蘭学を学び塾頭にもなっているから、『蘭学階梯』も教本としていたであろう。しかし、歌は、アルファベットの綴りをどう発音していくかを教える例示としてカタカナで示されているだけで、その意味は格別説明されていない。

前者の西川如見の『百姓囊』であるが、西川は大槻より100年以上も前に生まれた長崎の天文・地理学者で、世界地理書の『華夷通商考』で知られている。歌は『百姓囊』ではなく、町人の心得を論じた享保4（1719）年刊の『町人囊』に記されている（日本思想体系第59巻『近世町人思想』所収）。西川はそこで、或る書に「日本は異国に違ひて神系を尊びたる国にて高家みな神明の血脈なる故、道德広才秀逸成（なる）人は、必ず公家・武家の中より出る者也」とあり、またそれについて或る人が「此書の説、其理いまだ委しからず。植てみよ花のそ

だ、ぬりもなしといふ歌は、誰も知りたる事ながら、委しく意を付る人のなきにや」と述べ、更にこの或る人なりの解釈を引用・紹介している。その解釈の内容は、あえて要約すれば「能書文学才芸」が成就するか否かは、「都」と「鄙」のいずれの環境で成育するかによるのであって、「畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし」、「人間本心の上におゐて、何ぞ貴賤の差別あらん」ということになるうか。しかし、この解釈をもってしても今一つ「心からこそ身はいやしけれ」の意味は判然としない。『町人囊』の活字化にあたり、編者は、歌の下句「心からこそ身は賤しけれ」の底本は『百物語』（上）で、「人間について、都鄙、貴賤の別を論ずべからず」の意であると頭注を付している。どうやら「いやしけれ」は「賤しけれ」と解してよさそうであるが、それでは、誰もが知っているというこの歌について、底本の『百物語』ではどのように記されているのか。

万治2（1659）年初版の『百物語』（近世文学資料類従第24巻『仮名草子編』所収）の序には、小ざかしき童たちが寄り集まって、古人の語り伝えに、百の物語をすれば必ず怖き物が現れるという、今宵は雨もそは降り「ものすごき夜」だから、試みてみようという一人が言いだし、こわごわ百の話の始めたというタイトルの由来が述べられている。

この初版には百話の目録があり、第1話「手習のしやうの事」の本文にまさしくこの歌が登場するのであった。その内容は、最近「レッド・クリフ」という映画にもなった有名な中国の三国時代の赤壁の戦いを題材にした「赤壁賦」の詩で著名な宋代の詩人・書家の蘇軾（蘇東坡・東坡居士）の教をふまえて、書の「手習」をしなければならぬという話である。蘇軾は、書は真書（楷書）、行書、そして草書の順に学べ、例えば真書（楷書）は立つが如く、行書は行くが如く、そして草書は走るが如くである、立って行かなければ走る者はいない、「本立て道なる」が「ことわり」なのであると教えている。ところが、当今の手習いは書その逆に学んでいく、しかも楷書まで進む人はまれで、大方は草書を覚えるにとどまっている。心を尽くして習わなければどうして習い得ようかとして、この「植て見よ／花のそた、ぬさともなし／ころからこそ身はいやしけれ」の歌を掲げているのであった。

文久2（1862）年、福澤が日本語を習得したいと接近してきたフランス人青年「レオン・ド・ロニー」への献辞としてこの古歌を選んだ真意こそ、そこにあったに違いない。何であれ、「道」を志すには「本」が大切であると伝えたかったのであろう。ロニーが東洋語学校の教師として採用され、1863年に、日本語学科の学生のために出版した『日本文集』の劈頭にこの福澤自筆の色紙を載せたのも、まことにむべなるかなと言えよう。

2012.10.20 記

福澤諭吉とレオン・ド・ロニー、 そして「植えて見よ」の古歌



すが わら もり くに
菅原彬州
(北海道出身・法学部教授)

1 福澤諭吉の渡欧

幕末の文久元年12月23日(1862年1月22日)、日本人36人を乗せたイギリスの軍艦オーディン号が品川を出帆した。これらの日本人とは、いわゆる竹内使節団一行のことで、幕府が、万延元(1860)年、日米修好通商条約批准書交換のためにアメリカに派遣した使節団に続いて、江戸・大坂の開市(市場を開くこと)と兵庫・新潟の開港延期交渉のために、ヨーロッパの条約締結諸国に派遣した最初の使節団であった。正使・竹内下野守保徳、副使・松平石見守康直、目付(監察)・京極能登守高朗の3人を特命全権公使とするこの使節団には、当初の「使節一行人員録」(35人)にその名がなかった福澤諭吉が、出発時には「御雇通詞」として加わっていた。福澤は、遣米使節団派遣の際には、勝海舟が艦長であった咸臨丸に軍艦奉行・木村摂津守喜毅の従僕の身分で乗り組み渡米したが、この遣欧使節団派遣にあたっては、外国方翻訳局員というその語学力を評価され、正規の団員として渡欧することになったのである。

まだ太平洋航路がなかったため、軍艦オーディン号は、横浜・長崎に寄港したのち、香港・シンガポールを経由してインド洋から紅海を帆走し、文久2年2月20日(1862年3月20日)イギリスの植民地であるアラビア半島のアデンに到着した。スエズ運河の開通は明治2(1869)年のこ

となので、アデンに上陸した使節団は、鉄道でエジプトのカイロそしてアレキサンドリアへ行き、イギリスの兵員輸送船のヒマラヤ号に乗船、途中で地中海のマルタ島に寄港しながら、文久2年3月5日(1862年4月3日)、フランスのマルセーユに到着した。砲台から15発の祝砲が放たれるなか、伊達政宗が派遣した仙台藩士支倉常長(1613年)以来250年ぶりに、日本人一行がヨーロッパ大陸の地を踏んだのである。品川を出帆してから約2か月半、70日余を費やす長途の旅であった。

文久2年3月7日(1862年4月5日)、使節団一行は、物見高い人びとが群がるなか馬車でホテルを出発して鉄道に乗車、リヨンで2泊したのち、3月9日(4月7日)の夜7時頃にパリに到着し、「ロテル・デュ・ルーブル」(L'hotel du Louvre)にその旅装をといた。

このホテルについて、福澤は「館は王宮の門外に在り。巴理府最大の旅館と云。六層楼を分て六百室となし、旅客止宿する者、常に千人より下らず。婢僕五百余人、其他衣肆、浣衣婦、匠工等、此館に属せる者ありて、日用の事物は悉く館内にて便ずべし」と記している。

使節団がテュイルリー宮殿でフランス皇帝ナポレオン三世に謁見したのは6日後の3月15日(4月13日)であるが、そのパリ滞在中、使節団の動静はフランス人の最大の関心事であった。東洋の日本からはるばるやってきた日本人に対するその好奇心の高まりのほどは、使節団のマルセーユ到着以後のフランスの絵入り新聞『イリュストラシオン』ほか各紙の報道に如実に示されているのであった。

2 若き日本研究者のレオン・ド・ロニー

使節団を接遇したフランス政府関係者のなかに、通訳兼接待委員となったレオン・ド・ロニーというフランス人青年がいた。レオン・ド・ロニー(正しくはレオン・ルイ・リュシャン・プリュノル・ド・ロニー「Leon Louis-Lucien-Prunol de Rosny」1837-1914)は、1863年、パリの東洋語学校の日本語の講師、さらには、1868年、東洋語学校の日本語講座の正式開講にあたって初代教授となり、その後、国際東洋学会議を創立するなど、フランスにおける日本語教育の礎を築いた人物として、日仏文化交流史に

その名を残している。

ロニーの祖父は陸軍大尉の軍歴のある文学者で、父もまた考古学者・歴史学者という家系であったからか、ロニーは、最初は生理学と植物学に興味を持ち、その相関関係を研究したりしていたが、ふとした機会に漢字の辞書に接してから、魅せられたように中国語の研究に没頭していき、そのうち次第に同じ漢字圏の日本にも興味を抱くようになり、ついには独学で日本語の研究に取り組み、17歳のころから日本語に関する著書を次々と発表するなど、フランスにおける日本研究の草分け的存在となった。

奇人とも言われたロニーの日本最上については、日本の事物を好み、日本風の生活を取り入れ、キセルで刻み煙草を吸うところまで、日本に傾倒していたといわれる。人が日本の悪口を言うと怒り出すほど、まるで日本に取り憑かれたようなロニーにとって、日本使節の渡欧のニュースは生きた日本語に接する一大好機であり、したがって、その日本知識と日本語能力が評価され、通訳兼接伴委員に起用されたのは願ってもないことであったのである。

ロニーは使節団が宿^(みつく)泊^(りしゅうべい)したパリのホテルを足繁く訪ね、福澤をはじめ翻訳方兼医師の箕作秋坪・松木弘安ら洋学(蘭学・英学)の素養がある団員との交友を深めるとともに、フランス国内にとどまらず、使節団一行が訪問するヨーロッパ諸国のさきざきにも随伴したのである。ロニーと使節団との関わりについて、「日本使節巡行記事」(官板洋書調編『海外新聞別集』所収)は、次のように記している。

「又此度日本人と同道せし人にレオン・ド・ロスネイといへる勝れたる学士あり年齢は僅に二十五歳なれど胸に数多勲爵の表章を懸たる人にて東洋及び亜墨利加の事を講究する任を受け嘗て東洋言語を学ぶに善き書籍を著せり。此人今度仏蘭西政府の命を蒙り日本人に陪従し日本人欧羅巴諸国を周行する間之に同伴する由なり」

3 福澤とロニーの交流

それでは、福澤が滞欧中の日々の出来事を記録した『西航記』から、ロニーについて書き留めている記事を摘記してみよう。

○文久2年3月19日(1862年4月17日)

「仏蘭西の人『ロニー』なる者あり。支那語を学び又よく日本語を言ふ。時に旅館に來り談話時を移す。本日語次、魯西亜のことに及び、『ロニ』云、去年魯西亜の軍艦対馬に至り已に其全島を取れりと聞けり、信なりやと。余其浮説なることを説弁せしに、翌日新聞紙を持ち來り、昨日の話、魯西亜の対馬を取りたるは全く虚説なることを此紙に記して世上に布告したりと云へり。」

○文久2年3月28日(1862年4月26日)

「『ロニ』と共に薬園に至る」

○文久2年5月24日(1862年6月21日)

「ロニ巴理より來る。」

○文久2年6月14日(1862年7月10日)

「『ロニ』仏に歸。但し母の病を聞けるなり。」

○文久2年7月22日(1862年8月17日)

「巴理の羅尼來る。此人は日本語を解し又能く英語に通ず。日本使節巴理に在りし時より時々旅館に來り余輩と談話せり。使節荷蘭^(オランダ)え逗留中、羅尼、政府の命を受け、日本人を見る為めハーゲに來り、留ること二十日許、母の病を聞き巴理え歸り、今度又た日本人を尋んとして別林^(ベルリン)に來りしに、余輩已に同所を出立せり。由て又た別林より伯徳祿堡^(ベテルスブルグ)に來れり。別林より伯徳祿堡までの道程八百里、火輪車にて此鐵路を來る入費四百フランク。唯余輩を見ん為めに來る。欧羅巴の一奇士と云ふべし。」

福澤がロニーを「羅尼」と表記しているのは、福澤が単に発音を漢字にあてはめたのではなく、ロニー本人が「自ら姓名を訳し羅尼と書」いていたからであった。

以上が福澤の滞欧日記である『西航記』の記すところであるが、さらにこのほかに『福澤諭吉全集』(第19巻)の編集に際して「西航手帳」と仮に名付けられた手帳にも、ロニーのことが記されている。

福澤は、パリで買い求めたこの手帳を、まさに日々のメモ帳として使用しているが、そこには日本語だけでなく英語やオランダ語などさまざま

な文字が記されている。また、明らかに福澤以外の人物が名前や語句を直接書いている箇所もあり、『福澤全集』は「ロニーの筆蹟であろう」としているものの、間違いなくロニーの筆跡と断定してよい文字がある。

ロニーは「日本朋友」の「羅尼」と漢字で自署し、そして「Monsieur Leon de Rosny / Membre du Conseil dela Sosiété d'Ethnographie et dela Sosiété / Asiatique / 15 rue Lacépède Paris / or to Sosiété / d'Ethnographie / Paris」とフランス語で連絡先を記している。さらに、福澤がロニーに質問したのであろうか、「第一年吾ハミナ東語ヲマナヒマシタ。ワルシ。タ、イトケナシ」と書き込み、自分が接した中国語の古典として「四書」「大学」「論語」「中庸」「孟子」「史記」「老子」「千字文」「三字経」「康熙字典」「礼記スコシク」「詩一〔経〕オ、クモツトモコノム」「書経オ、ク」「好迷伝」「玉嬌李」伏国記などの書名を列記している。

そして、ロニーの書き込みの脇には、「羅尼十年前より和漢学を始め所読左〔右の誤記と思われる〕の如し」「1852」「始テ学ブ」と、福澤が注記しているのがあった。

使節団のパリ滞在中のみならず、ハーグ、ベルリン、ペテルスブルグまで使節団に会いにやってきたロニーと福澤との交流は、ロニーにとっては、日本に関する知識を得たり、自分の日本語能力を会話により確かめ、それをさらに向上させる絶好の機会であったし、福澤にとっては、ロニーを通じて西欧の制度や文物に関する知識を深めるのに有益であったに違いない。

4 ロニー宛ての書翰と福澤自筆の古歌

福澤とロニーは、直接の面談にとどまらず、折にふれ書通があった。『西航記』の文久2年6月14日(1862年7月10日)の条に「〔ロニ〕仏に帰。但し母の病を聞けるなり」とあり、また文久2年7月22日の条に「羅尼、政府の命を受け、日本人を見る為めハーグに來り、留ること二十日許、母の病を聞き巴理え歸り」とあったが、福澤は、オランダのハーグに滞在中の文久2年5月21日(1862年6月18日)、ロニーに宛てて、次のような書翰を認めている。

「

福澤諭吉
先日ヨリ度々貴翰ヲ送ラレ、難有存シマス。今日コノ京(ハーグのこと)へ御着ノヨシ、私ドモニ於イテ甚タヨロコビマス。何卒少シモ早ク御目ニカカリ存シマス。

私アナタノ家ニマイリタク存シマスレドモ、色々用事アリテマイルコトアタワズ、甚タ残念(左脇に Sorry と記入)ニ存シマス。謹言

六十二年 六月十八日

羅尼君

(封筒の宛名)

Aan du heer Leon de Rosny. / te / Kaizershof / s'gravenhage.

勒温羅尼様」

この書翰は日本語としては何かたどたどしく、福澤がこのような文章を綴るのは奇異な感じもするのであるが、しかし、漢字は楷書体で書かれ、漢字カタカナ交じりの文章に不慣れなロニーを気遣って、丁寧にルビがつけられている。日本語を学ぼうというロニーに対する福澤の心あたたまる配慮が、そこには示されているのであった。

また、福澤がベルリンで認めたロニー宛ての手紙には、「私ドモ日々君ノコトヲ話シ、忘ル、コトナシ。実ニ欧羅巴中唯一人ノ良友 good friend ト思ヘリ」とあり、ロニーと福澤・箕作・松木ら使節団員との交流が親密であったことがわかる。

福澤の優しい思いやりは、「植て見よ 花のそた、ぬ里ハなし こゝろからこそ 身ハいやしけれ」という古歌を、ロニーに書いて贈ったことにも、よく示されている。この古歌については、本誌65巻1月号の「アスペクト」欄でも採り上げたのであるが、紙幅の関係でよく意を尽くせなかった。以下、重複するところもあるが、改めて史料をふまえながら再考してみたい。

まず、ロニーは、東洋語学校の日本語講師として採用された1863年に、彼が教える日本語受講の学生たちの教材として『RECUEIL DE TEXTES JAPONAIS』(『日本文集』)をパリで出版し、そして、その第1ページに、

この古歌を載せたのであった。

当初、福澤の署名があるこの古歌については、「その毛筆の日本字は紛れもない先生の筆蹟」であるから「其の三十一文字も先生のものであらう」、しかも「今日伝わつた福澤の唯一の和歌」とされていたが、その後、それが誤りであり、この古歌は大槻磐水（玄沢）の『蘭学階梯』に見え、さらにさかのぼれば西川如見の『町人囊』にあることが判明したのであった。そうであるとすれば、のちの近世蘭学者の間では、よく知られていた古歌であったと見てよい。

それでは、この古歌はどのように解釈すればよいのか、また、福澤がどのような意図から、ロニーにこの古歌を書いて贈ったのであろうかという点について、さらに考えてみよう。

5 『蘭学階梯』と『町人囊』

洋学と言えは蘭学を意味したころ、オランダ語を学ぶ者が必ず手引きとしたであろう書物が大概玄沢の『蘭学階梯』である。大概は、その「比音」の項で日本の「説話言談何ニテモ彼方ノ文字ニテ書テ見ルベシ」と述べ、日本語の発音をアルファベットでどのように表記するかというまさに例示として、上段にカタカナでこの古歌を、下段にアルファベットの筆記体で、その表記を、次のように載せている。

「*Wveyetemiyo Vanano Sodatanoe Satomonasi Koqolokalakoso miwa yieiasikele*」

蘭学を志す者に限らず、そもそも学問を修めようとする初学者にとって、この古歌の意味は自明のものであったのかもしれない。

さらに時代を遡っていくと、『町人囊』（『日本思想体系』第59巻に所収）の「巻四」に、この古歌に触れたところがある。長文であるが、以下の通りである。

「或書に云、『日本は異国に違いて神系を尊びたる国にて、高家みな神明の血脈なる故、道徳広才秀逸成人は、必ず公家・武家中より出る者也』とあり。或人は是を論じていへるは、「此書の説、其理いまだ委しからず。植てみよ花のそだぬ里もなしといふ歌は、誰も

知たる事ながら、委しく意を付る人のなきにや。夫人間は陰陽五行の神物なり。其始、尊卑の隔なく、都鄙のかはりなし。しかれ共出胎已後、漸々習ひ染る処によつて、尊卑都鄙の品相分る。此故に都の小児、鄙にて成長する時は則鄙人の風俗と成、鄙の小児を都にて成人せしむれば、則都の風俗となれり。町人などの中には、其先祖歴々たる処の者甚だ多しといへ共、常の町人に替たる人品もなし。愛宕殿鷹とならるれば鷹の心有とかや。名もなき町人・百姓の子にも、幼少より習ふ所によつて、篤実広才なる者も昔より多く出たる事有。総て高貴の人は胎内より氣に觸物にうつる所、皆いやしからず、見る事聞事、食事衣服のそなへゆたかに、弓矢墨筆のたぐひよりいやしき物をば手にさへとらず、心にくるしむ事もなくて成長あるゆへに、能書文学才芸も成就仕安し。町人・百姓の子は胎内より市井の風俗にそみ、幼少より薪とり水汲土掘の業、又は荷もち細工等を所作とする故に手足筋骨もあらあら敷ねぢけたり。能書文学の暇もなく、偶暇有とても、筋骨こわくて筆をとるに不堪、能書の嗜ある人は、ふすま障子をさへみづからあけたてをせずといへり。たとへ下賤土民の子なり共、出生より其俣富貴の家にて成長せしめなば、能書文学の養れ有人も多く出来べし。ましてや剛臆などは貴賤による事にあらず。思ひなしからによくもあしくも見ゆる事多からん。貴人の血脈はみなおのづから君子となる理ならば、胎教のみ幼儀のならひなども無用成事也。その俣置ても徳行博才の人となる理なりといへども、生立あしければ不徳無能の人と成と見えたり。いかに凡卑の血脈といふ共、胎教の道を守りて胎内より正しきみちに触しめ、出生しては君子の傍に置て幼儀を習ひ、才芸をもてあそばしむる事あらば、天性命分の品に依て、美悪鈍智の替りは有共、其人品、高位高官の人に替りなかるべし。畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理なし。唯生立によると知べし。傾城は多くは下賤なる者の子なれども、幼少より風流にみがき立る故に、諸人を誑ほどの姿風俗となれり。況や人間本心の上におゐて、何ぞ貴賤の差別あらん。いかなる賤がふせやに居ても、心は

万人の上に延んものなり。武家は氏筋を正して家の威を遅くしたまはん事最なり。町人の氏筋をたつるは必ず貧乏の相なりとかや。

以上、引用が長くなったが、「或書」への「或人」の論評に「植てみよ花のそだゝぬ里もなしといふ歌は、誰も知たる事ながら、委しく意を付る人のなきにや」とあることが、この西川如見の『町人囊』からわかるのである。まさに、この古歌は広く世人に知られた「歌」であったといえる。

そして、この「或人」の論評にこそ、この古歌の解釈についての鍵があるように思われる。

6 『百物語』の第1話

古歌の解釈の検討に入る前に、西川如見の『町人囊』の活字化にあたって、古歌の下句の「こゝろからこそ身は賤しけれ」は、『百物語』(上)にあるという頭注が付けられているので、それを先に見てみよう。

万治2(1659)年初版の『百物語』(近世文学資料類従第24巻『仮名草子編』)の序には、書名の由来について、次のように述べられている。

「此物語を百物語となづくるのハ有夜の徒然なるまゝにござかしき童よりあつまりてあそびしに。一人申出せしハ草も木もわが大君乃国なればいづくが鬼のすみかなるらんとはいへども。いにしへハあ乃山に鬼あり此村にはばけ物出しなど、伝へし事おほし此比の御代ハ四海なみしつかにおさまり。風枝をならさぬ時なるにや。世中にふしぎなし。まことなるやいにしへ人の語り伝へに何にても百物語をすればかならずこワき物あらハれ出るとうけ給はりし。今宵ハ雨もそほふり物すごき夜なればしめやかに百物語しそのこハきもの出るか心見てあの世の昼めしにせむといひければ。のをのをの然るへしとてはや物語をはじめける。」

さらに、この初版には百話の目録があり、第1話「手習のしやうの事」の本文中に、まさしくこの歌が登場するのであった。

「人の語りけるハ東波居士のいひをきしとかや。人の手ならいするに先真をならひ。次に行をならひ次に草を習べし。真は立がごとく行はゆくがごとく草ハはしるがごとし。それよく立つて行かずハ走

るものハあらじといへり。此事事文類聚に見えしと也。誠に本立て道なるといふことハりなるべし。此国にならへるは東坡のいへるとハかへさまなり。先草を習て行をならひ真をならふと也。かくのとき人もまれなり。ただ大かた草ばかり覚るゆへに文盲にして真に書字ハよく知りたる字にてもよミえざるなり。いと口惜し。心をつくして習なば。などかならひえざ

植て見よ花乃そたゝぬさともなし

こころからこそ身はいやしけれ

といへり。又兼好も手のわるき人のはからずかきちらすハよし。見くるしとて人にかゝするハうるさし」

中国北宋時代の詩人・書家である蘇東坡は、書の道について、まず「真」(=楷書)を習え、それがすべての道のスタートラインに立つということである。次に「行」(=行書)を習うべし。そうでなければ道を歩むことはできない。それから「草」(=草書)を習わなければならない。すなわち、その歩みを走りにつなげていくことによって、まさにそのめざした「道」が成るのであると教えている。しかるに、日本ではそれとは正反対の方法で習い始めるが、大半は「草」の段階に終始しているから、いつまでも「道」を行くことができず、ましてや走ることなど到底かなわないのであるという、そういう話になっているのであった。

この第1話では、古歌の下句を、「心をつくして習わな」ければ、どうしてその道を成し遂げることができようか、と解釈している。しかし、それでも「身はいやしけれ」の意味は、なお今一つ釈然としない。

7 「植えて見よ」の古歌の意味

この古歌の意味を検討するにあたって、それがこれまでどのように表記されてきたか、これまで採り上げてきた文献が世に現れた順に、もう一度整理して、これらの表記の異同を見てみよう。

① 『百物語』

「植て見よ花乃そたゝぬさともなしこころからこそ身はいやしけれ」

② 西川如見『町人囊』

「植てみよ花のそだゝぬ里もなし」

(頭注「こゝろからこそ身は賤しけれ」)

③ 大槻玄沢『蘭学階梯』

ウ エ テ ミ ヨ ハ ナ ノ ソ タ ク ス サ ト モ ナ シ コ コ ロ カ ラ コ ソ ミ ワ
「Wveyetemiyo Vanano Sodatanoe Satomonasi Kogolokalakoso miwa
iyeiasikele」

④ 福澤諭吉の書いた古歌

「植て見よ花のそだゝぬ里ハなしこゝろからこそ身ハいやしけれ」

まず、上句をどのように表記するにせよ、上句の五文字の意味に違ひはないと言える。すなわち「植えてみよ」という意味である。続く語句について、①『百物語』、②『町人囊』、③『蘭学階梯』では、「花の育たぬ里もなし」であったが、④福澤は「里ハなし」と書いている。福澤は、最初、大坂で緒方洪庵が開いた塾でオランダ語を学び、塾頭にまでなっているから、『蘭学階梯』をよく知っていたと思われるのに、なぜか「里ハなし」と書いているのである。福澤に限らず、誰でも知っている「歌」であったからか、今日でも「里もなし」がある一方、「里ハなし」の「歌」として紹介・理解されたりしている。

ところで、この「も」と「ハ」の相違は、何も問題がないように思ってしまうが、はたしてそうであろうか。「里ハなし」であれば、花が育たない里などどこにもない、どのような里であろうと花は育つだから、とにかく花を植えてみなさいという意味の上句であるという解釈も成り立つ。その場合、上句だけでも独立した意味をもつ「歌」として理解させることができるし、事実、そのような意味として受けとめられてしまうことも少なくない。

しかしながら、このように上句を理解するとすれば、その上句と続く下句との意味上の連関性は、どのようになるのであろうか。極論すれば、上句は上句で成り立ちながらも、下句は上句のいうところから従って花を植えれば、よい効果ないしは結果がえられることを示す句として、理解されるのではなかろうか。

まさに、「いやしけれ」を「癒しけれ」と受けとめている現代人もいる。植えた花はいずれこの里であろうと必ず育ち、それによって人は癒やされ

るのであるから、とにかく花を植えてみなさいという通俗的な通り一遍の意味にしかならず、深い含蓄のある歌には到底なりえないと言っても、過言ではないであろう。

しかし、「里もなし」の場合は、どのような「心もち」で花を植えなければならぬか、「心もち」いかんによって大きな花が育つか否かが決まるということを示す意味の下句が、上句に続いて述べられてしかるべきであるし、まさにそれを示すような下句が続いてこそ、この古歌はより大切な教えを伝える歌として完結するのである。そうであるとすれば、『町人囊』の編者の頭注にあるように、下句の表記は、「身は賤しけれ」または「身は卑しけれ」と理解するのが自然であり、それをふまえて、この古歌全体を理解しなければならないと言えるであろう。

理解の鍵は、やはり『町人囊』にある「或書」への「或人」の論評と『百物語』第1話の「手習のしやうの事」の内容である。

前者は、「或書」の「日本は異国に違いて神系を尊びたる国にて、高家みな神明の血脈なる故、道德広才秀逸成人は、必ず公家・武家中より出る者也」についての「或人」の解釈を紹介したものである。すなわち、人は、「都」で生まれようが「鄙」で生まれようが、もともと「尊・卑」の「隔（へだて）」がある訳ではない。しかし、生まれた後「漸々習ひ染る処によつて」「尊卑都鄙」の「品」が分かれてくる。「都」の環境で生まれて成長する高貴の人は、容易に「能書文学才芸」を成就する道が用意されているが、「鄙」で生まれた者の場合、それは「都」の貴人と同じ環境に身をおいて育つか否か、あるいは、「幼少より習う所」のもの如何によつて、その「道」の成否が大きく左右されるのである。畢竟、人間は根本において「尊卑」の別などないのであり、ましてや「人間本心」の上において「貴賤」の別もないのであって、「能書文学才芸」の成就是そこにかかっているのである。

『百物語』第1話についても同じである。楷書から行書へ、そして行書から草書へと書の習いを進めていかなければ、書の道は成就しないという蘇東坡の教えに喩えて、まさに「本」が立ってはじめて「道」は成るのであるということ、を、教えているのである。

そうであるとするれば、『町人囊』も『百物語』も、人はいかなる「道」をめざそうとも、それは「人間本心」の上において「賤しい」または「卑しい」身であると思うところから、何事も始めなければならない。すなわち、何事も「謙虚」な「初心の心もち」をもって精進することが「道」の成就にとって大切であるというところに、この「植えて見よ」の古歌の教えがあると、解されるのである。

福澤がロニーにこの古歌を書いて贈った真意もそこにあったと言える。ロニーが古歌の教えをどこまで理解していたかわからないが、福澤の真意をそれなりに感得していたからこそ、『日本文集』の巻頭に、福澤自筆のこの古歌の画像を載せたのであろう。

福澤から古歌を贈られた6年後、ロニーは『よのうはさ』という日本語の新聞の発行も手がけていて、『もしほ草』(第16編、慶応4年6月5日)は、次のように伝えている。

「西洋紀元千八百六十八年第三月廿四日即ち今戊辰四月四日(正しくは三月一日)、フランス国巴黎におゐて羅尼といふ人はじめて「よのうはさ」と外題せる新聞紙を刊行せり。みな日本のひらがなもて書き、日本人直によミえらるべきやうにかきあらハせるものなり。この羅尼といふ人ハ、支那印度および東方諸国の言語文字につうじ、ことさら日本語を能^{よく}す。且つその人となり西国に生長しながら東方諸国のふうぞくにんじやうのしつぽくなることを愛せりと。又その著述に日本仏朗西対訳字書あり。既にパリスにおゐて刊行せり。このひといまだいちども日本に渡来せずしてかく日本語につうだつせるはじつに賞誉にたえたり。」

仄聞するところによれば、福澤がロニーに書いて贈った古歌は現存していて、近年、保管していた子孫により、リヨン市に寄贈されたとのことである。

<参考文献>

市川清流『尾蠅欧行漫録』(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書第2、1929)。

福澤諭吉『西航記』(『福澤諭吉全集』第19巻、岩波書店、1962)。

福澤諭吉『西航手帳』(同上)。

慶應義塾編『福澤諭吉書翰集』第1巻、岩波書店、2001。

大槻玄沢『蘭学階梯』1788(国立国会図書館が画像を公開)。

西川如見『町人囊』(『近世町人思想』日本思想大系第59巻、岩波書店、1975)。

『百物語・私可多咄』(『仮名草子編』近世文学資料類従第24巻、勉誠社、1977)。

